清流劇場2019年7月公演

出演／
高口真吾 Takaguchi Shingo
泉希衣子 Izumi Keiko
倉増哲州 南森町グラスホッパーズ Kuramasu Tessyuu
服部桃子 Hattori Momoko
日永貴子 Hinaga Takako
永津真奈 Aripe Nagatsu Mana
立花裕介 Tachibana Yusuke
萬谷真之 Mantani Masayuki
上海太郎 上海太郎カンパニー Shanghai Taro

音楽・演奏／
仙波宏文 Semba Hirofumi

アルケスティス異聞

Alcestis

a strange episode

原作／エウリピデス
原作翻訳・作・ドラマトゥルク／丹下和彦
構成・演出／田中孝弥

SEIRYU THEATER 2019
Alcestis – a strange episode

playwriting : Euripides
translation, adaptation & dramaturgy : Tange Kazuhiko
adaptation & direction : Tanaka Atsuya

SEIRYU THEATER
清流劇場

アルケスティス異聞

Alcestis

a strange episode

近年、清流劇場公演の合間に実施しているギリシア劇勉強会。お陰様で好評を博しております。その最大の要因は、勿論、講師の丹下先生のお話が面白いからです。

今回の上演作品『アルケスティス異聞』を扱った回でも示唆に富むお話を聞かせていただきました。夫の身代わりになって死を決意するアルケスティスという女性について考えを巡らせるのに、こんな文章があるといって先生が紹介してくださったのが、森鴎外の『安井夫人』でした。（この『安井夫人』、青空文庫というサイトにて無料で読むことが出来ます）

さて、この安井夫人（＝お佐代さん）のことを記した部分を少し長くなりますが、引用してみたいと思います。（仲平というのは夫の名前、儒学者・安井息軒のことです）

お佐代さんはどういう女であったか。美しい肌に粗服をまとって、質素な仲平に仕えつつ一生を終った。飫肥吾田村（おびあがたむら）字星倉（あざほしくら）から二里ばかりの小布施（こぶせ）に、同宗の安井林平という人があって、その妻のお品さんが、お佐代さんの記念だと言って、木綿縞（もめんじま）の袷（あわせ）を一枚持っている。おそらくはお佐代さんはめったに絹物などは着なかったのだろう。

お佐代さんは夫に仕えて労苦を辞せなかった。そしてその報酬には何物をも要求しなかった。ただに服飾の粗に甘んじたばかりではない。立派な第宅（ていたく）におりたいとも言わず、結構な調度を使いたいとも言わず、うまい物を食べたがりも、面白い物を見たがりもしなかった。

お佐代さんが奢侈（しゃし）を解せぬほどおろかであったとは、誰も信ずることが出来ない。また物質的にも、精神的にも、何物をも希求せぬほど恬澹（てんたん）であったとは、誰も信ずることが出来ない。お佐代さんにはたしかに尋常でない望みがあって、その望みの前には一切の物が塵芥（ちりあくた）のごとく卑しくなっていたのであろう。

お佐代さんは何を望んだか。世間の賢い人は夫の栄達を望んだのだと言ってしまうだろう。これを書くわたくしもそれを否定することは出来ない。しかしもし商人が資本を卸（おろ）し財利を謀（はか）るように、お佐代さんが労苦と忍耐とを夫に提供して、まだ報酬を得ぬうちに亡くなったのだと言うなら、わたくしは不敏にしてそれに同意することが出来ない。

お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでいただろう。そして瞑目（めいもく）するまで、美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれていて、あるいは自分の死を不幸だと感ずる余裕をも有せなかったのではあるまいか。その望みの対象をば、あるいは何物ともしかと弁識していなかったのではあるまいか。

大痘痕（あばた）で片目の不男・息軒へ、自ら「あちらで貰うてさえ下さるなら自分は往きたい、ときっぱりと申」し出たお佐代さん。封建社会には珍しい女性による人生の主体的な選択でした。彼女の夫への「献身・犠牲」もまた、旧態依然とした意識や因習から解き放たれた主体的な行動であり、彼女は実に自由な女性として生きたと言えます。

お佐代さんの視線は足許を見るでもなく、顔を上げ、遠い所に注がれています。その姿に、ボクはお佐代さんの覚悟が見える気がします。〈勿論、生きていれば、日々の暮らしの中で、不平や不満が溜まることもあるでしょう。だけど、そんなことは些事に過ぎない。この視線の先のどこかに、もっと大切なことはきっとあって、わたしは、それを見つけたい。わたしは真に生き抜きたい〉と。そして、アルケスティスもまた慣わしや制度に囚われることなく、生き抜いたのではないか。「王の身代わりになって死ぬ」そのために生まれ、生きたわけではない。と、そう思うのです。

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。ごゆっくりお楽しみください。

ご挨拶

adaptation & direction：Tanaka Atsuya

清流劇場　代表　田中孝弥

三日後の朝

――『アルケスティス』から『アルケスティス異聞』へ――

大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者　丹下和彦

ギリシアの小国ペライの王アドメトスに死の宣告が下る。ただし身代わりに死んでくれる者を見つければ死は免れると言う条件が付く。アドメトスは必死になって身代わりを捜す。父親ペレスにも頼むが拒絶される。

ペレス　わたしはおまえをわが家の主人として生み育ててきた。だが、おまえの代わりに死なねばならん義理はない。父親が子供の代わりに死ぬだと？　そんな決まりは父祖伝来の法にはない。

見かねた妻が身代わりを申し出る。

アルケスティス　あなたを誰よりも大事な方と思い、わが命に代えても、あなたがこの世の光を仰げるようにとの心遣いから死んでいきます。

とはいうものの、「本当は死ぬ必要はない。……誰か好きな男の人を選んで幸せな家庭を築くこともできる」と、ちらと本音らしきものも垣間見せる。

それでも夫の身代わりになろうとするのはどういう心根からだろうか？　哲学者プラトンはそれを「愛の殉死」だという。

さらにはまた殉死であるが、ただ恋をしている者だけがこの覚悟ができるのであって、このことは男子に限らず、じつに女子もまた能くするのである。そしてこの点に関してはまたペリアスの娘アルケスティスが、このぼくの主張を支える充分な証しをギリシアの人々に提供している。

（プラトン『饗宴』鈴木照雄訳）

父親は嫁が息子の身代わりに死んでくれたことを歓迎する。一家が率いるペライ王国を没落の危機から救ってくれたからである。そのくせ息子との生死問答では、おまえは妻の犠牲で生き延びた卑怯者だと息子を非難する。

息子は妻の犠牲で生き延びることを受け入れながらも、いざ死なれてみると妻への愛惜この上なく、その死を悼んで悲嘆にくれる。

誰しも人生の節目でそれぞれ誠実に生きようとはするものの、すべからく自己中心的でその言辞様態は傍の者の眼には限りなく滑稽でもある。アドメトスは妻アルケスティスを身代わりとして死を免れた。ペレスは息子アドメトスから要求された身代わりを拒絶した。その二人が互いの行動を非難し合う。

ペレス　そうだ、わたしは死ぬのが嫌だ。おまえだってそうだろう。神がくださるこの光は本当に愛しいからな。

アドメトス　その心根は卑怯未練もいいところ。男らしくありません。

ペレス　その言葉、そっくりお返ししよう。

人間が太古の昔から繰り広げてきたリアルにして辛辣な死生観であり人間観である。

劇の末尾、死神と格闘してアルケスティスを取り戻したヘラクレスは、彼女を夫アドメトスの手に返す。かくして大団円となる。そう見える。いや、そうだろうか？

とりあえずは一度死に捧げられた身の浄化が済むまでの三日間、アルケスティスは口が利けない。喜びに溢れる夫婦の再会は三日間延期になる。

この劇には俳優が二人しか使えないという制約があった。いま、舞台には三人の人物が居る。ヘラクレスとアルケスティスとアドメトスである。一人は「黙り」を使うしかない。作者エウリピデスは浄化のための沈黙という理由を付けてアルケスティスに「黙り」を当て、俳優数の制限をうまくくぐり抜けると同時にアルケスティスを沈黙させたまま幕を下ろした。

古代（前三～二世紀）にこの劇に付けられたヒュポテシス（古伝梗概）は言う、

「この劇はサテュロス劇的である。悲劇的な調子が最後は喜びと楽しさに変わるからである」（サテュロス劇とは山野の精サテュロス

が合唱隊を構成し、卑猥な言辞様態で笑いを取る口直しの笑劇）と。

はたしてそうか？　どうもわれわれには「喜びと楽しさ」を素直に感じ取れないところがある。われわれ観客が求めるのはいまの「喜びと楽しさ」よりも三日間の沈黙のあとアルケスティスが放つ第一声ではあるまいか。だが作者はその前に劇を閉じた。

エウリピデスの『アルケスティス』はここで終わる。後を継ぐのが『アルケスティス異聞』である。

エウリピデスの『アルケスティス』の意地の悪い終わり方にいささか欲求不満のわれら観客は、帰途誘い合って立ち寄った酒亭であれこれ感想をぶつけ合う。

思いがけず二度目の生を得たアルケスティスはかつてのあの幸せな生活には戻らず、あらためて新たな生き方を模索し始めるのではないか。

アドメトスはアルケスティスと死別し（そしてまたおそらくは）生別することによって、初めて「生きること」の意味を認識し追求し始めるのではないか。

『アルケスティス異聞』は、エウリピデスから与えられた謎、宿題に対する一つの解答例である。

話は簡単だ。平和な暮らしの中に「死」が割り込んでくる。当該人、また周囲の人間たちが、好むと好まざるとにかかわらず「死」とどう向き合うかを考える。「死」を考えることは「生」を考えることである。「死」を控えてどう生きるか、どう生きるべきかを考えることである。それは個々人各自の問題だけにとどまらず周囲の人間たちにも波及し、ひいては相互の人間関係にまで問題は及ぶ。二十一世紀のわれわれももちろん問われている。

アドメトスは死の身代わりを求める正当なる理由――死への恐怖以外の説得性のある理由を示しえない点で悲劇の人物となることを逸した。その狼狽ぶりはむしろ失笑の対象だと言ってよい。

ではアルケスティスはどうだろうか。その死の理由は何だったのか。プラトンはそれを「愛の殉死」であると称揚する。しかしその死は愛する夫への殉死という利他的なものではなく、よい意味での利己的なもの、いや死だけでなく生きることも彼女自らのある目的のためである、といえるのではないか。アドメトスも彼女のその思いに触れて新たな生を求め始める。

『アルケスティス異聞』は二人の姿のそこまでを見通そうとする試みである。

Euripides PROFILE

作家紹介（原作）

エウリピデス

紀元前480年（『エウリピデス伝』『スーダ辞典』による）～紀元前406年

ギリシア三大悲劇詩人の一人。
父親ムネサルコスと母親クレイトの間に生まれる。父親は貧しい行商人。母親は市場の野菜売り。アテナイ市もしくはその近くのサラミス島で生まれたとされる。はじめは格闘技の選手を目指すが、のちに精神的世界へ関心を示し、プロタゴラスに修辞学を、ソクラテスに倫理学と哲学を学ぶ。アナクサゴラスへも師事するが、彼の学説が「太陽神アポロンへの不敬」とされ、政治的迫害を受けたのを機に、悲劇作家に転身する。その作風は革新的であり、伝統的な悲劇の世界へ知性と日常性を導入した。作品様式面では「機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）」という劇作技法を多用したことが特徴的である。紀元前408年、マケドニア王アルケラオスに招かれ、都（ペラ）へ赴く。紀元前406年、マケドニアで客死。
劇壇のライバル・ソポクレスは訃報に接し、丁度競演会の予備行事の場にいたが、喪服に着替えて弔意を表したという。
その容貌については「そばかす、濃いあごひげ」との短評あり。作品は三大悲劇詩人の中で最も多い19編が残存している。
主な作品：『メデイア』『ヒッポリュトス』『エレクトラ』『タウロイ人の地のイピゲネイア』『ヘレネ』『オレステス』『バッコス教の信女たち』等

SEIRYU THEATER 2010

Alcest IS - a strange episo

playwriting : Euripides
translation, adaptation & dramaturgy：Tange Kazuhiko

Synopsis of “Alcestis — a strange episode ”

あらすじ

小国ペライを治める王アドメトスは突然、「死」の運命に襲われます。ただし、「誰か身代わりを差し出せば、その死を免れることが出来る」という条件が付きます。アドメトスは懸命に身代わりを探しますが、両親をはじめ誰一人として引き受けてくれる者はいません。最後に妻のアルケスティスが身代わりを申し出てくれて、やっとアドメトスは命拾いをします。

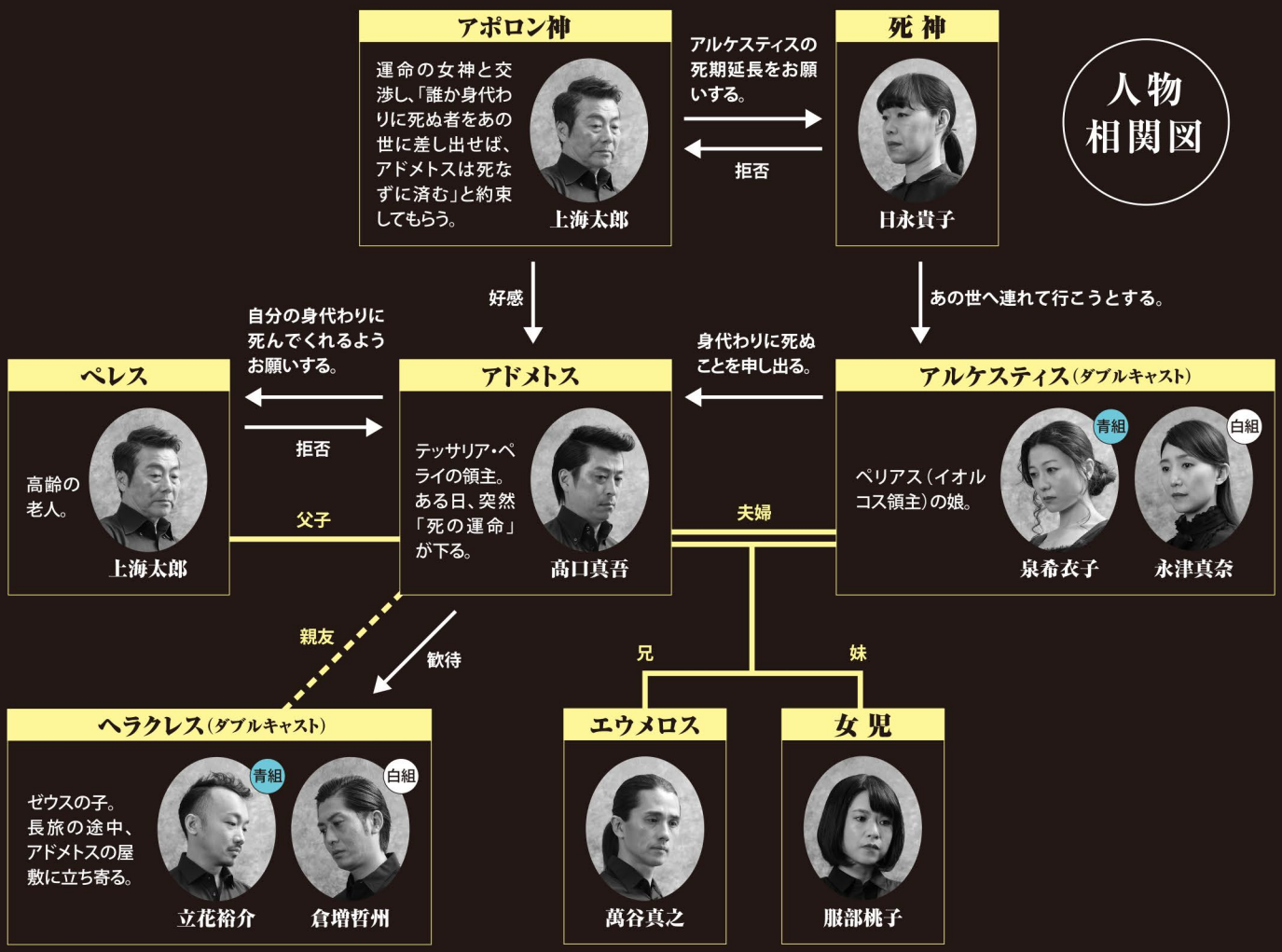
アルケスティスの葬儀当日。皆が悲嘆に暮れているところへ、アドメトスの友人ヘラクレスが訪ねてきます。情が深く義に篤いアドメトスは妻の死を隠してヘラクレスを歓待します。ヘラクレスは事情を知らないまま接待を受け、心地よく酩酊してしまいます。

アドメトスの父親ペレスはアルケスティスの葬儀に参列しますが、親子の間で口論が起きます。アドメトスが「何故、老い先短い父親が身代わりになってくれなかったのだ。」と怒りを向ければ、父ペレスは「息子の身代わりに親が死ぬ義理もないし、そのような掟もない。」と反論します。

やがて、酩酊したヘラクレスは「妻アルケスティスが亡くなったこと」を知らされます。ヘラクレスは喪中を隠してまで歓待してくれたアドメトスの心意気に感じ入り、アルケスティスを冥界から取り戻すべく死神と格闘し、見事この世へ連れ帰ります。甦ったアルケスティスでしたが、この後、三日目の朝が来て、冥界に捧げられた身の浄めが済むまでは口が利けません。アドメトスは妻の完全な「甦り」を待って祝宴を催すことにします。

…と、エウリピデスが書いた『アルケスティス』はここで幕を閉じますが、本作品はこれを受け継ぎながら、もう少し物語を続けます。

人物相関図



※青組・白組の表記のないキャストは両組共通になります。

アルケスティス異聞

Alcestis

a strange episode

アルケスティス異聞

Alcestis

a strange episode

2019年 7月 11日（木） 14:00【青組】・19:00【白組】
12日（金） 19:00【青組】
13日（土） 14:00【白組】・19:00【青組】
14日（日） 14:00【白組】
（14日終演後アフタートーク開催）

会場／一心寺シアター倶楽
大阪市天王寺区逢阪 2-6-13 B1F　tel：06-6774-4002　http://isshinji.net/kura/index.html

舞台監督／K-Fluss　舞台美術／内山勉　舞台美術アシスタント／新井真紀
照明／岩村原太　照明アシスタント／塩見結莉耶　照明オペ／木内ひとみ　音響／廣瀬義昭（㈲ティーアンドクルー）　音響オペ／奥村威
衣装／田中秀彦（iroNic ediHt DESIGN ORCHESTRA）　衣装アシスタント／加藤沙知
ヘアメイク／歯朶原諭子（High Shock）　ヘアメイクアシスタント／島田裕子　小道具／濱口美也子　振付／東出ますよ　狂言指導／茂山逸平
写真／古都栄二（㈲テス・大阪）　ビデオ／㈱WAVIC　web・制作協力／飯村登史佳　宣伝美術／黒田武志（sandscape）
特別協力／森和雄　演出助手／大野亜希

協力／
㈲ウォーターマインド　イズム　㈱MC企画　㈱舞夢プロ　10ANTS　バンタンデザイン研究所大阪校　ギリシャのお店Φ（フィ）
柏木貴久子　堀内立誉　雨宿いろの　藤原ほのか　安宅汐音
佐々木治己　川口典成　嶋田邦雄　山下智子　森岡慶介　居原田晃司

提携／一心寺シアター倶楽
制作／永朋　企画／清流劇場

アフタートーク出演者／
パネラー：田中孝弥（清流劇場代表）　丹下和彦（大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者）
司会：広瀬依子（追手門学院大学講師）

芸術文化振興基金助成事業

https://seiryu-theater.jp
お問い合わせ：清流劇場 e-mail：info@seiryu-theater.jp

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧ください。

メンバー募集 ● 清流劇場の活動に興味のある方、俳優・スタッフに興味のある方は、劇団までご連絡ください。